相互協調的自己観と内集団バイアス[1)]

― 最小条件集団パラダイムにおける状況要因と個人要因の効果 ―

高田利武*・中村美智子**・濱野千恵美***・山邊瑞枝****

The interdependent construal of self and ingroup bias

―The effect of situational and personal factors on ingroup favoritism in the minimal group paradigm―

Toshitake TAKATA, Michiko NAKAMURA, Chiemi HAMANO and Mizue YAMABE

要　旨

社会的アイデンティティ（Tajfel, 1978）に依拠した自己認識がもたらす内集団バイアスの現象を、文化的自己観（北山, 1998）の観点から検討することが本研究の目的である。相互協調的自己観が優勢な日本文化において、社会的アイデンティティが自己認識を強く規定する条件として、(1)状況要因としての他者からの評価懸念の有無（清家・高田, 1997）、(2)個人要因としての相互独立性－相互協調性の程度（高田・大本・清家, 1996）、の2つを取りあげ、(1)最小条件集団パラダイムを用いた分配課題と、(2)内集団に対する評価、の2つの指標を通じて内集団バイアスの程度を測定した。

実験操作が有効であった被験者のみを対象とした場合、他者からの評価懸念が高まった状況では、自他関係をカテゴリー化して認知し、内集団を好意的に評価する一方、配分における内集団贔屓は抑制される傾向が見られた。評価懸念がない状況では、配分と内集団評価の双方で、従来の諸知見と同様な内集団バイアスが見られた。他方、相互独立性－相互協調性と内集団バイアスとの関連は、相互独立性の低い、あるいは相互協調性の高い者が評価懸念のない状況で内集団を好意的に評価したことを除いて、殆ど認められなかった。

問　題

社会的アイデンティティ理論（Tajfel, 1978）によれば、自分がある集団に属しているという知識から生じる自己概念の側面が社会的アイデンティティとされる。さらに、社会的アイデンティティは、所属する集団の成員であることへの評価や感情を含む。そのため、肯定的な評価を得るべく自分の属する内集団と他の集団（外集団）とを比較し、内集団を外集団より優位に位置づけようとする結果、内集団を外集団よりも好意的に評価・処遇する内集団バイアス（柿本, 1997）が生じる。

この過程を実証的に検討した嚆矢が、Tajfel, Billig, Bundy & Flament（1971）による所謂最

平成12年8月25日受理　*社会学部人間関係学科　**ニッケン文具株式会社　***株式会社万代　****ジャスコ株式会社

小条件集団パラダイム（minimal group paradigm）である。被験者は些細な根拠に基づき2つの集団のいずれかに配属され、成員間の相互作用は全くない匿名状況で、自分の属する内集団の他成員と属さない外集団の成員に対する得点分配課題を行うが、分配の結果は被験者自身の利害に全く関係ないにも拘わらず、外集団成員よりも内集団成員に有利に分配を行う内集団贔屓の現象が認められたのである。

これに対して、他者とは異なる自分の内的特性に立脚した自己概念が個人的アイデンティティであり、一己個人の自己概念は社会的アイデンティティと社会的アイデンティティの双方の側面から構成されていると言える。而して、そのいずれが個人の自己認識において突出するかは、自己と他者の類似性を比較検討した結果に基づく、とする自己カテゴリー化理論をTurner（1987）は唱える。即ち、自分と似た他者との間に内集団というカテゴリー、差異の大きい他者は外集団というカテゴリーが形成された場合は社会的アイデンティティによって自己を捉える一方、内集団の成員と自分との差異を強く認知し、自分個人対他者というカテゴリーが形成された場合には個人的アイデンティティによって自己を認識すると言う。

このように自己カテゴリー化理論では、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの関係を、専ら類似性認知に基づいたカテゴリー化という、個人の認知機制に依拠して説明するが、これを比較文化的視点から捉えることも可能であろう。社会的アイデンティティが、一群の他者から成る所属集団と同一化した自己認識であるならば、他者との関係性から自己を認識する文化的背景を持つ個人は、自己を社会的アイデンティティの側面から捉える傾向が強いことが予想されるからである。北山（1998）の提唱する文化的自己観の観点から言えば、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える相互協調的自己観が優勢な文化では、自己を他者から分離した独自な実体と捉える相互独立的自己観が優勢な文化でよりも、社会的アイデンティティは個人的アイデンティティよりも自己の認識を強く規定するであろう。

しかしながら、文化的自己観は個人の認知的表象ではなく社会的表象である故（北山, 1998）、個々人のレベルの自己認識やそれに伴う行動形態には、当然、同一文化内においても変動性がある。したがって、相互協調的自己観が優勢な日本文化において、ある個人がとりわけ社会的アイデンティティの側面から自己を認識する程度は、いくつかの要因によって変動するであろう。そのような要因の一つとして、自分の行為や選択に対する他者からの評価を懸念する事態が考えられる。斯かる状況は、Duval & Wickland（1972）の言う客体的自覚状態であり、自己－この場合は他者との関係性から捉えられた自己－に注意が集中する。このため、自ずと自他の関係をカテゴリー化して認知する傾向は強まり、結果として内集団バイアスが生じる可能性が考えられる。

日本人大学生の自己査定行動を検討した清家・高田（1997）は、自分の行為や選択が他者から評価される状況においては、自分の能力水準を明確にしようとする自己査定行動が抑制される傾向があることを示している。さらに、他者との関係の円滑化や持続化等の配慮が生じ、自己と他者を同じ水準に位置づけようとする人並み志向が喚起されたことが、その背景にあることが示唆されている。これは、内集団バイアスとは直接の関連はないものの、他者からの評価懸念は、自己認識における他者との関係性の顕現化をもたらすことを示す一つの証左と捉え得よう。

他方、上述した状況的要因と並んで、個人的要因が考えられる。社会的表象である文化的自己観が個人の自己認識に反映された程度には個人差がある。従来いくつか作成されている文化的自己観尺度（Singelis, 1994；木内, 1995；高田・大本・清家, 1996）は、そのような個人差－相互独立性と相互独立性－を測定するものであるが、したがって、相互協調性が強く相互独立性の弱い個人は、自他のカテゴリー化傾向とそれに伴う内集団バイアスが強まる傾向が顕著であることが予想される。

浜口（1977；1982）は、他者との関係の中で自分というものを意識し、他者との間柄を自分の一部であると考える東洋の人間観を「間人主義」と呼んでいる。これは北山（1998）の言う相互協調的自己観と一定程度対応した概念と言えるが、間人主義があてはまる度合いである「間人度」の高い個人は、内集団バイアスの傾向が強いことを柿本（1995）は報告している。これは個人の相互独立性－協調性と内集団バイアスとの関連を示唆する知見であるが、柿本（1995）は内集団バイアスの指標として、主に内・外集団成員への評価を用いており、Tajfel *et al.*（1971）以来の最小条件集団パラダイムに依ってはいないため、従来の諸知見との対応関係は必ずしも明確ではない。内・外集団への評価と並んで、伝統的な得点配分を内集団バイアスの指標とした上、双方の関連を検討する必要があろう。

このような論議に基づき、(1)自他をカテゴリー化して認知する傾向と(2)カテゴリー化認知と内集団バイアスとの関係、に影響を及ぼす、(a)状況的要因と(b)個人的要因に関する以下の仮説を、最小条件集団パラダイムを用いて検討することが本研究の目的である。即ち、

仮説１a：自分に対する他者からの評価懸念がある状況では、それがない状況でよりも、自他関係をカテゴリー化して認知する傾向が高まるであろう。

仮説１b：相互協調性が高い、あるいは、相互独立性が低い個人は、自他関係をカテゴリー化して認知する傾向が顕著であろう。

仮説２：自他関係をカテゴリー化して認知する傾向が強いほど、得点分配と内集団に対する評価の双方において、内集団バイアスが顕著であろう。

仮説２a：内集団バイアスは、評価懸念がない状況よりも評価懸念がある状況で、より強く見られるであろう。

仮説２b：内集団バイアスは、相互協調性が高い、あるいは、相互独立性が低い個人で顕著であろう。

方　法

被験者　奈良大学学生89名（女子29名、男子60名）。集団力学の講義受講者で、参加点を与えられる条件の下に、被験者となることを申し出た者である。

概　要　先ず、被験者は籤引きによりＡ・Ｂいずれかの集団に割り振られる。次いで先行研究（例えば、吉田・久保田，1994）に準じた分配マトリックスを用いた分配課題を行う。この際、自分の分配の結果が他者に評価されるとする懸念条件と、然らざる非懸念条件が操作される。分配課題の後、被験者は、割り当てられた集団に関する質問等を含んだ質問紙と、相互独立的－相

互協調的自己観尺度（高田他，1996）に回答する。

手続き　被験者は3～10名同時に指定の時間に実験室へ来室する。実験の都合上、被験者は2つのグループに割り振られるため籤を引くこと、籤にはA・Bの2種類あり、Aを引いた被験者はA集団、Bを引いた被験者はB集団とされることが教示された後、被験者は籤引きによってA・Bいずれかの集団に振り分けられた。

次いで被験者は、集団成員性のみが知らされた2人の他者（内集団成員と外集団成員）に得点を分配する課題を行う。ここでは、金品の代わりに得点を分配すること、分配の基準に善し悪しはないこと、得点分配は被験者自身には関係しないことを強調した教示が行われるとともに、分配マトリックスを用いた得点分配が分かり難いことが考えられるため、例を用いた詳しい説明がなされた。

ここで、実験条件の操作が行われ、懸念条件では「印象調査票」が配布された。これは、既に配分を行った被験者の印象を、親切な、いじわるな等5つの形容詞を用いて評価するものであり、被験者の行った配分は他の学生に示され、この調査票によって評価されることが教示された。また、配分課題終了後、被験者自身もこの調査票を用いて以前の実験参加者の印象評価を行うと伝えられた。非懸念条件では、この手続きは省略された。

分配マトリックス　次に、分配マトリックス（Tajfel *et al.*, 1971）を用いた分配課題が行われた。マトリックスは、吉田・久保田（1994）に従い、(1)内集団贔屓（FAV）、(2)内集団贔屓－公平性（FAV-F）、(3)内集団贔屓－最大共同利益（FAV-MJP）、(4)最大差異－（最大内集団利益＋最大共同利益）（MD-(MIP+MJP)）、の4種のマトリックスを用いた（表1参照）[2]。

表1　分配マトリックス

内集団贔屓														
A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
B	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
内集団贔屓－公平性														
A	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
B	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	
内集団贔屓－最大共同利益														
A	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
B	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	
最大差異－（最大内集団利益＋最大共同利益）														
A	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	
B	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	

内集団贔屓のマトリックスでは、選択のランクの中央値（7.5）と選択されたランクとの差を指標とした。その他のマトリックスでは、同一マトリックスで内集団成員と外集団成員の位置が入れ替わった2つの場合で分配の選択が為され、2つの選択のランクの差を指標とした（pull得

点)。また、被験者が内集団成員に与えた全得点と外集団成員に与えた全得点との差である内集団贔屓得点（Diehl, 1990）も指標とした。以上の計7つのマトリックスに加え、配分を受ける2名の双方が内集団成員あるいは外集団成員であるダミーのマトリックス2つも含んだ、総計9つのマトリックスに対して被験者は配分を行った。引き続き、懸念条件の被験者のみ、実験者が適宜配分したマトリックスを呈示し、その配分を行った者を、「印象調査票」を用いて評価した。

質問紙　印象調査（懸念条件）あるいは配分課題（非懸念条件）の後、被験者は質問紙に回答した。質問紙は、(1)実験操作の有効性確認の1項目、(2)カテゴリー認知測定の3項目、(3)内集団への評価を測定する形容詞対10個（表3参照）、(4)相互独立的－相互協調的自己観尺度20項目（高田他, 1996）、から構成されている。全手続き終了後、被験者には実験の真の目的が説明され、実験操作に対する疑念の有無が尋ねられた。

結　果

実験操作の有効性　他者からの評価懸念の操作確認のための質問（自分の得点配分を人がどう思うか気になったか？）への回答の平均値は、懸念条件は2.47（*s.d.*=1.47）、非懸念条件は3.13（*s.d.*=2.15）で、有意差はない（$t(87)=1.79$）ものの、操作とは逆に非懸念条件の被験者の方が他者を気にしている傾向が認められた。そこで、懸念条件で「全く気にならない」、非懸念条件で「非常に気になった」と回答した被験者は、条件操作が有効でなかった者としてこれ除外し、爾後の分析は懸念条件27名、非懸念条件29名の合計56名のみを対象とすることとした。この場合の各条件の回答平均値は表2に示す如くで、平均値間の差は有意である（$t(54)=4.99$ $p<.001$）。

カテゴリー認知　配分課題の際に、自他をカテゴリー化して認知する程度を測定する3つの質問（配分の際、自分に割り当てられた集団を意識したか、自分の割り当てられなかった集団を意識したか、自分の割り当てられた集団の一員であると感じたか）への回答について主成分分析を行ったところ、第1主成分のみが抽出された（累積寄与率78.6%）。そこで、3つの質問の評価値

表2　諸指標の平均値

	懸念条件	非懸念条件		懸念条件	非懸念条件
評価懸念	3.33 (1.18)	1.76 (1.18)	内集団活動性評価	4.31 (1.49)	4.13 (2.85)
カテゴリー認知	4.40 (1.64)	3.46 (1.76)	内集団凝集性評価	4.48 (1.04)	4.26 (1.00)
pull得点（1）	0.39 (2.53)	0.88? (2.83)	相互独立性	4.33 (0.86)	4.52 (0.94)
pull得点（2）	-0.11 (3.36)	1.50? (5.08)	相互協調性	4.99 (0.64)	4.73 (1.05)
内集団贔屓得点	9.33? (16.17)	13.54** (40.49)			

・評価懸念、集団意識、内集団評価は7段階評価の平均値。（　）内は標準偏差。
・pull得点(1)は内集団贔屓マトリックス、pull得点(2)は最大差異－(最大内集団利益＋最大共同利益)マトリックスでの配分。以下の表も同様。
・** $p<.01$　? $p<.10$で、0より有意に大、あるいはWilcoxon検定で有意。

の平均値を算出し、カテゴリー認知得点とした。その実験条件毎の平均値は表2のとおりであり、懸念条件の被験者は非懸念条件よりも、操作された内集団と外集団の区分を意識した程度が有意に高い（$t(54)=2.05$ $p<.05$）。

カテゴリー認知と配分の内集団贔屓　内集団贔屓と最大差異－（最大内集団利益＋最大共同利益）の分配マトリックスにおけるpull得点と、内集団贔屓得点の実験条件毎の平均値を表2に示す。また、カテゴリー認知得点とpull得点・内集団贔屓得点との間の相関係数を、実験条件毎に示したのが表4である。

カテゴリー認知との相関において、懸念条件では内集団バイアスとの関連は見られない。他方、非懸念条件では、カテゴリー化認知の傾向の強い者に配分での内集団贔屓が顕著であることを示す、有意な相関が認められる。さらに、内集団贔屓マトリックスと内集団贔屓得点については、母平均値＝0を帰無仮説とするt検定、内集団贔屓と最大差異－（最大内集団利益＋最大共同利益）のマトリックスについてはWilcoxonの検定を、実験条件毎に行った。その結果、非懸念条件では、内集団贔屓（$t(28)=1.70$ $p<.10$）、最大差異－（最大内集団利益＋最大共同利益）（$z=-1.64$ $p<.10$）、内集団贔屓得点（$t(27)=2.99$ $p<.01$）の夫々において、内集団贔屓の傾向があった。それに対して懸念条件では、内集団贔屓得点で傾向が見られた他は（$t(26)=1.80$ $p<.09$）、有意な内集団贔屓は見られなかった。

カテゴリー認知と内集団の評価　内集団の評価を測定する形容詞10対への反応を因子分析（主因子解、バリマックス回転）したところ、表3に示す2因子解を得た（累積寄与率56.8%）。第1因子は、優れている、活発な、陽気な、責任感のある、意欲的な、面白い、親切な、の各特性から構成されており、「活動性」の因子と考えられる。一方、第2因子は、まとまった、安定した、親しみやすい、の特性から成り、「凝集性」の因子と解釈した。夫々の因子に含まれる項目の平均値を算出し、夫々、活動性評価、凝集性評価の得点とした。

表3　内集団評価形容詞の因子分析

	第1因子	第2因子
優れている―劣っている	.7040	.2620
活発な―不活発な	.6649	.3185
陽気な―陰気な	.6614	.1757
責任感のある―無責任な	.6104	.2600
意欲的な―無気力な	.5969	.3640
面白い―つまらない	.5872	.4705
親切な―不親切な	.3647	.2302
まとまった―バラバラな	.3274	.8443
安定した―不安定な	.3707	.5813
親しみやすい―親しみにくい	.0521	.3119
固有値	4.64	1.03
寄与率	46.44	10.32

表4　カテゴリー認知得点との相関係数

	懸念条件	非懸念条件
pull得点（1）	-.155	.513**
pull得点（2）	-.003	.413*
内集団贔屓得点	.120	.498*
内集団活動性評価	.451*	.449*
内集団凝集性評価	.527**	.315?

・? $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$

カテゴリー認知得点と各内集団評価得点との間の相関係数は表4、実験条件毎の内集団評価得点の平均は表2に示す如くである。評価得点との間の相関係数は、懸念・非懸念条件の双方において有意であり、カテゴリー化認知の強い者は内集団に対して好意的認知をしている。一方、双方の評価得点とも、条件間の有意差は見られなかった（活動性：t (54)=0.30、凝集性：t (54)=0.83)。

相互独立性ー相互協調性との関連　相互独立性・相互協調性各10項目の平均値は、夫々4.43 (*s.d.*=0.90)、4.86 (*s.d.*=0.88) であり、これは大学生の大量サンプルに基づく値（相互独立性：4.46、相互協調性：4.89、高田 (2000) 参照）と有意な差はない（相互独立性：t (55)=0.25、相互協調性：t (55)=0.25)。また、各実験条件での平値は表2のようであり、条件間に有意差はない（相互独立性：t (54)=0.81、相互協調性：t (54)=1.12)。

これまで検討した諸指標と相互独立性ー相互協調性との相関係数を、実験条件毎に示したのが表5である。懸念条件と非懸念条件の双方を通じて、一般にカテゴリー認知、内集団贔屓配分、内集団評価は、相互独立性とは負、相互協調性とは正の相関が示されているが、統計的に有意あるいはそれに近い相関は、懸念条件でのカテゴリー認知と相互独立性、凝集性評価と相互独立性、非懸念条件での凝集性評価と相互独立性・相互協調性に限られている。また、いずれの指標においても、相互独立性との相関係数と、相互協調性との相関係数との間に有意な差は見られなかった。したがって、配分における内集団贔屓と相互独立性ー相互協調性との関連は、実験条件の如何に拘わらず総じて認められない。

表5　相互独立性ー相互協調性との相関係数

	懸念条件		非懸念条件	
	相互独立性	相互協調性	相互独立性	相互協調性
カテゴリー認知	-.361?	.209	-.148	.148
pull得点(1)	-.267	.066	-.083	.152
pull得点(2)	-.063	.208	-.029	.109
内集団贔屓得点	-.092	.179	.058	-.009
内集団活動性評価	-.137	.055	-.055	.182
内集団凝集性評価	-.321?	.211	-.386*	.315?

・? p <.10　* p <.05

更に、カテゴリー認知の程度と相互独立性および相互協調性が内集団バイアスに及ぼす相対的影響を検討するべく、前3者を独立変数、3種の配分指標と2種の内集団評価の夫々を従属変数とする重回帰分析を、実験条件毎に行った。その結果が表6である。これによると、非懸念条件ではカテゴリー認知の標準化回帰係数が有意であり、カテゴリー化した認知をするほど配分でも集団評価でも内集団バイアスが強い。また、相互独立性と相互協調性は、集団の凝集性評価のみに関連しており、前者が低く後者が高いほど内集団バイアスが強い傾向がある。これに対して、

懸念条件では、全体としてカテゴリー認知と相互独立性－相互協調性は配分に影響していないが、内集団評価に対してのみ、カテゴリー認知の程度が高いほど内集団の評価が好意的である。

表6　重回帰分析の結果

	懸念条件				非懸念条件			
従属変数	重相関係数	集団意識	相互独立性	相互協調性	重相関係数	集団意識	相互独立性	相互協調性
pull得点(1)	.384	.287	-.403?	-.063	.520*	.505**	.054	.108
pull得点(2)	.293	.095	-.245	.306	.523*	.412*	.097	.104
内集団贔屓得点	.206	.108	.044	.181	.517*	.520**	-.044	.181
内集団活動性評価	.554*	.464*	.014	-.035	.538*	.474**	-.192	.176
内集団凝集性評価	.547*	.470*	-.126	.052	.558*	.392*	-.343?	.313?

・重相関係数以外の数値は標準化回帰係数。** $p<.01$　* $p<.05$　? $p<.10$

考　察

実験操作が有効であった被験者を対象とした場合、本研究から得られた知見を再確認すれば、以下の如くとなろう。即ち、

(1)懸念条件では非懸念条件でよりも、内集団と外集団の区分を意識した程度が有意に高い。したがって、「他者からの評価懸念がある状況では、自他関係をカテゴリー化して認知する傾向が強まる」という仮説1aは支持されたと言える。

(2)非懸念条件では、内・外集団のカテゴリー認知と、配分と内集団評価の双方における内集団バイアスとの間に相関があるが、懸念条件では、内集団評価でしか相関が認められない。これは、懸念条件での配分の結果を除けば、「カテゴリー認知が著しいほど、内集団バイアスは強まる」という仮説2を支持している。

(3)配分における内集団贔屓は非懸念条件で顕著に見られたが、懸念条件では認められなかった。また、懸念条件と非懸念条件との間で、内集団の評価には差が見られなかった。これは「内集団バイアスは懸念条件でより顕著である」という仮説2aとは全く逆の結果である。

(4)相互独立性－相互協調性とカテゴリー化認知との関連は、殆ど認められなかった。したがって、「相互独立性が低い、あるいは相互協調性が高い者は自他カテゴリー化の傾向が著しい」という仮説1bは支持されなかった。

(5)相互独立性－相互協調性と内集団バイアスとの関連は、非懸念条件での凝集性評価を除いて、総じて見られなかった。したがって、「相互独立性が低い、あるいは相互協調性が高い者は内集団バイアスを顕著に示す」という仮説2bは、非懸念条件における内集団の凝集性評価以外では支持されなかった。

更に、重回帰分析の結果をも考慮すると、社会的アイデンティティが顕現化する状況的要因と個人的要因に関して、本研究の結果からは以下の如き結論が下せるであろう。

(1)他者からの評価が予期される状況（懸念条件）では、自分と他者を内・外集団にカテゴリー化して認知する傾向は高まり、それは内集団への好意的評価という側面では内集団バイアスを増大せしめているが、得点配分ではバイアスは消失する。他方、非懸念条件では、カテゴリー化認知は然程ではないにも拘わらず、それは得点配分と内集団評価の双方で内集団バイアスをもたらしている。

(2)相互協調性の高い個人、あるいは相互独立性の低い個人が、内・外集団にカテゴリー化して自他関係を認識する傾向は見られない。また、相互独立性の低い個人は内集団の凝集性を高く評価するバイアスを示す傾向が、非懸念条件においてのみ認められたが、これはカテゴリー化認知とは関連せずに、相互独立性の低さが直接喚起した結果である可能性が考えられる。

特に他者からの評価が期待されない非懸念条件は、最小条件集団パラダイムを用いた従来の諸研究と略同一の状況であるが、そこでは分配における内集団贔屓と内集団評価の双方で、内集団バイアスが一般的に認められた。また、自他をカテゴリー化して内・外集団として認知する傾向が強い者には、内集団バイアスが顕著であることが確認された。これらの知見は、社会的アイデンティティ理論あるいは自己カテゴリー化理論と一致するものであり、従来の諸知見を追認したものと言える。

然るに、自他のカテゴリー化認知と内集団バイアスを促進することが予期された要因の効果に関しては、必ずしも仮説は検証されず、あるいは仮説と全く逆の傾向が見られた。先ず、状況的要因としての他者からの評価懸念については、それがカテゴリー化認知を増大せしめることは確認されたが、その増大したカテゴリー認知に沿った内集団バイアスの増大は、内集団への好意的評価が上昇するに止まった。懸念条件ではカテゴリー化認知が増大したにも拘わらず、分配における内集団贔屓は見られなかったのである。

評価懸念によりもたらされたカテゴリー認知の昂進が、内集団への好意的評価の増大という認知的操作のレベルにおいて、内集団バイアスを導くことは比較的容易に生じ得る。それに対して、実際の行為を伴う分配作業は、単なる認知変更より被験者の心理的負荷が相対的に大きいであろう。それ故、分配を通じた内集団贔屓はカテゴリー認知の程度に応じて一義的には増大せず、天井効果を示した可能性、あるいは、相互協調的文化で一般的と考えられる平等分配の規範が内集団贔屓を抑制した可能性を考えることもできよう。内集団バイアスの主要形態である、内集団への分配と評価との関係については、今後更に検討を加えることが必要である。

他方、個人的要因としての相互独立性－相互協調性に関して、明確な影響が認められたのは、非懸念条件において相互独立性の弱い者は内集団の凝集性評価が高い、という効果のみであった。更に、相互独立性の弱さとカテゴリー認知との間の関連が認められなかったことから推して、その効果も、内集団バイアスの現れというより、相互独立性の弱い、あるいは相互協調性の強い者に通有の、他者への親和・順応（高田他，1996参照）という色彩を帯びているように思われる。この点に関しては、「間人度」による内集団バイアスの相違を報告している柿本（1995）の知見

も、内集団成員に対する評価を主要な測度としている点で、同様の疑念を呈し得る。ともあれ、今回の結果に基づけば、内集団バイアスを促進する個人的要因としての相互独立性と相互協調性の役割は疑問であると言わざるを得ない。

しかしながら、仮令他者への一般的な親和傾向を反映したものであるにせよ、相互独立性の弱い者が内集団成員への好意的評価を示したのは、自他のカテゴリー化認知の程度が然程でもない非懸念条件のみであり、カテゴリー化認知が著しい懸念条件では、そのような傾向は消失している。即ち、カテゴリー化認知が一定以上に大きくなった場合には、内集団バイアスが抑制されるという既に見た傾向は、個人差要因の効果にも及んでいることは注意を要する。更に、相互独立性－相互協調性と内集団バイアスの諸指標との相関係数を見ると、有意ではないものの、相互独立性では負相関、相互協調性では正相関が示されている点では一貫している。したがって、これらの点に関しては更に検討を要すると思われる。

本研究の最大の問題点は、他者からの評価懸念に関する実験操作に関して、被験者の3分の1を越える大量の操作誤認者が出たことである。これは、操作手続きの内容が必ずしも適切ではなかったことを示唆しており、斯かる不備な手続きに基づいて選択せられた被験者を分析対象とした本研究の知見は、吾人をしてこれに根本的疑義を抱かしむるに足るものである。然りと雖も、本研究の結果は、自他のカテゴリー化認知と内集団バイアスとの関係、更には内集団バイアスと社会的アイデンティティとの関係に、他者からの評価懸念と相互独立性－相互協調性が、何等かの形で関わっている可能性を示唆している。今後、実験操作を改善し、個人差要因の効果を更に明確にすべく被験者数を増やす等して、更に検討を加える必要があろう。

Summary

The effect that self-knowledge derived from the social identity (Tajfel, 1971) has upon the ingroup favoritism was experimentally investigated from the viewpoint of the cultural view of self (Kitayama, 1998), using the minimal group paradigm. Two variables, namely, (1) situational pressure of apprehensions for others' evaluation (Seike & Takata, 1997) and (2) independence / interdependence personal trait (Takata, Omoto & Seike, 1996), were examined. These variables constitute factors that determine whether or not self-knowledge is to be based on social identity in the Japanese society, where the interdependent self construal is dominant. The two indices of ingroup biases were (1) reward distributions to ingroup members and (2) evaluations of ingroup members.

The subjects (college students) who perceived evaluation apprehension correctly by the experimental manipulation were conscious of their social identity and evaluated their ingroup members favorably, but suppressed biased reward distribution. On the other hand, subjects who didn't perceive apprehension showed considerable ingroup favoritism in both reward distribution and group member evaluation; which is in accordance with many previous studies. No relationship between ingroup biases and the subjects' independence / interdependence was found with the exception that the high interdependence or low independence subjects evaluated ingroup members favorably in the condition characterized by no-apprehension pressure.

注

1）本稿は、中村（2000）・濱野（2000）・山邊（2000）が収集した元資料に資料を追加して、第一著者が再分析したものである。

2）内集団贔屓－公平性と内集団贔屓－最大共同利益のマトリックスについては、一部被験者に配布された用紙に誤植があったため、当該マトリックスはダミーとして扱い、以後の分析ではこれを除外した。

引用文献

Diehl, M. 1990 The minimal group paradigm: Theoretical explanations and empirical findings. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.) *European Review of Social Psychology. Vol. 1.* New York: Wiley, Pp.263-292.

Duval, S. & Wickland, R. 1972 *A Theory of Objective Self Awareness*. New York: Academic Press.

濱口恵俊　1977　「日本らしさ」の再発見　日本経済新聞社

濱口恵俊　1982　間人主義の社会日本　東洋経済新報社

濱野千恵美　2000　文化的自己観と他者への意識が集団間差別行動に及ぼす影響　平成11年度奈良大学社会学部卒業論文（未公刊）

柿本敏克　1995　内集団バイアスに影響を及ぼす個人差要因　社会心理学研究，**11**，94-104.

柿本敏克　1997　社会的アイデンティティ研究の概要　実験社会心理学研究，**37**，97-108.

木内亜紀　1995　独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究，**66**，100-106.

北山　忍　1998　自己と感情　文化心理学による問いかけ　共立出版

清家美紀・高田利武　1997　文化的自己観と自己査定行動　－日本文化における検討－　社会心理学研究，**13**，23-32.

Singelis, T.M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 580-591.

Tajfel, H. 1978 *Differentiation between Social Groups: Studies in the Social Psychology of Intergroup Relations*. London: Academic Press.

Tajfel, H., Billig, M.G., Bundy, R.P., & Flament, C. 1971 Social cotegorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.

高田利武　2000　相互独立的－相互協調的自己観尺度に就いて　奈良大学総合研究所所報，**8**，145-163.

高田利武・大本美千恵・清家美紀　1996　相互独立的－相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成　奈良大学紀要，**24**，157-173.

Turner, J. C. 1987 *Rediscovering the Social Group: A self-Categorization Theory*. Oxford : Blackwell.

中村美智子　2000　集団間差別に影響を及ぼす個人特性と状況要因　平成11年度奈良大学社会学部卒業論文（未公刊）

山邊瑞恵　2000　文化的自己観の相違によって生じる、他者評価の有無と内集団ひいきとのかかわり合い　平成11年度奈良大学社会学部卒業論文（未公刊）

吉田富二雄・久保田健市　1994　社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動　－最小条件集団パラダイムを用いて－　心理学研究，**65**，346-354.